

近世都市高砂の成立（1）

池田輝政の高砂築城

高砂が近世都市として成立したのは、慶長五年（一六〇〇）に播磨一国五二万石の領主となった池田輝政の高砂築城によるとされています。

『池田家履歴略記』には慶長十七年（一六一二）の項に「造高砂城」という見出しがあり、

播州高砂の城はいにしへ嘉吉年中松岡蔵人居住せしか、段々廃しけるを国清公中村主殿に仰て今年城普請有て中村を目代とせられ与力備百人附らる、かくて長三十三尋横十三尋の大船并千石余の大船百艘作て此浦に貯おかると記されています。文中の

「国清公」とは輝政、「中村主殿」とは輝政から東播磨八郡の仕置きを命じられた中村正勝のことです。この史料は一七九九年の序文をもつ後世の編纂物ですので信憑性にやや不安はありますが、これによつて慶長十七年に高砂城が作られたことがわかります。

おそらく慶長六年から十四年にかけての大規模な姫路築城が一段落したのち、高砂築城に着手したものと思われます。

『慶長播磨国絵図』（天理大学図書館蔵）にも城と高砂町が描かれています。ただしその規模は不明です。また、近世都市の成立ということでは、築城に先立って実施された加古川の付け替え工事と今津町の関係、および元和三年（一六一七）に姫路藩主となった本多忠政による高砂廃城後の市街地整備を検討しなければなりません。

（高砂市史編さん専門委員長
今井 修平）



慶長播磨国絵図